「発育停止治療」が提案されること自体が、悲しい

当 HP でも「あなたは、このプロジェリアの子ども達に、どう話しかけますか？（「雑学ＢＮ」の「緩和ケア関係」Ｐ、2004.12.25.：参照）」を記載したことがあるアシュリーちゃんのその後の様子が、２／１７に放送のあることをメル友に案内したところ、あるメル友から返信の中に次のようなことが記載されていた。

【　ところで、同じ Ashley という名前で、The Ashley Treatment というブログで両親が紹介している、「発育停止治療」とでも言うべき治療法について、何らかの倫理的問題があると思いますが、いかがでしょうか？
なお論文は昨年 10 月に出ています。その著者は治療法の選択肢の 1 つに加えるべきだという考えです。　】

「発育停止治療」とは初めて聞く言葉なので、あれこれネット検索してみた。
米国で発表された論文のようで、概要は、重度の障害のある子どもが、今以上に成長して体が大きくなると世話するのが大変なので、今の状態のままであって欲しいと願う親に応じようとする、投薬等で発育を止める治療法のよう。

メル友には、次のように返信した。
【　「発育停止治療」は親の都合で子どもの生命、生活を左右するようなことのように思え、ナンセンスな話と思います。
国連でも「子ども人権条約」が採択されているように、子どもは親の所有物ではないですよね。

こうした一人一人の生命の存在に関わる問題には、「ここからは有用な生命、こころからは不用な生命」というような線引きをしてはいけないと思っています。線引きの基準は、その時代の価値観で変わりますものね。
その行き着く先の人類のおぞましさが、ナチスによるユダヤ人虐殺問題のようなことだと思っています。

そうした人類のもつ生命の価値観を左右しかねないことの愚かさへの警鐘のためにも、重症児問題に今まで係わってきたつもりです。
「重症児と係わる仕事をするなら、世の中の価値観を改革するぐらいの勇気をもって仕事しろ！福祉とは、世の中に精神革命を起こすことぐらいの覚悟で仕事に取り組め！」と若い頃に教えられた自分としては、「発育停止治療」など、到底容認できるものでありませんし、そうした治療法が提案されること自体が悲しい……。
そうした論議が必要のない社会の構築に取り組むことこそが福祉と思います。　】

阿部幸泰　（2007 年 2 月 17 日　記）